

匠林

SAKABAYASHI

隨筆特集



至高の陶酔



金刀比羅宮蔵 寛政6年(1794年)円山応幸 晩年の作(部分)

220余年の伝統の技が贅をつくした「煌」きらめき。

讃岐の金毘羅酒として親しまれきた金陵が、酒づくりの贅をつつておくりだした清酒「煌」。金陵の歴史は今をさかのぼる(一)三〇余年の寛政元年。当主八代目であった西野嘉右衛門が金毘羅さんの齋ではじめて酒づくりがその第一歩。以来、金刀比羅宮のご神酒として栄誉をうけ、その丹精こめた手づくりの味わいを、金毘羅詣の人々から力強く親しまれてきました。酒酒「煌」のえも言われぬ風味と「煌」には、金陵の心意気と酒づくりの神髄が細やかに思っています。

真珠玉のべとく搗きあげ

水品のべとく研ぎすました酒造好適米(山田錦)

酒酒「煌」に使っているのは、酒造好適米の中から選びぬかれた最高の大粒米。これを丹念に高度精白し酒の雑味等の原因となる外層部を削り、磨き、吸水のよい、粟粒よりやや大きい、玄米のむすみから割はらの、まるで真珠玉のようなぶだけの酒米とする。これを、良質の寒の水でくり返くり返し研ぎすまし、本格的な酒づくりの仕込みへと移っていく。昔から「醗、二醗三造り」といわれいるとおり複雑多岐にわたる工程を熟達杜氏がつとめてきた。

つごなしていく。杜氏は寒中夜も眠らず、我が子を育てるまに精魂をこめ、技の限りを尽くして低温でじっくりくりあげ。こうして、清酒のアルコール分、旨味を米びから造り出した、手づくりの微妙精緻な煌を誕生させたのです。

芳醇なこく、口あたりの爽やかさ、喉ごしのよさ、まさに清酒の芸術品。この稀なる清酒「煌」を、日本酒をこたく愛するみなさまにじっくりと味わいつくしていただきたい。

煌
金陵
超特撰

税込 標準価格 10,800円 1.8L
5,400円 720ml
貴方さまだけの番号です。

ラベル右下に記しております番号は、一本一本責任をもって製造いたしました品質の証し。ご入手いただいた。

西野金陵株式会社 香川県仲多度郡琴平町六三三 電話(0877)734111

未発着の清酒は返金保証をさせていただきます。紙箱中や授賞期の飲酒は必ずお楽しみください。

酒林

SAKABAYASHI

隨筆特集



第93号

涸林

SAKABAYASHI

随筆特集

ほろ酔い詩歌紀行

モザイクプリンセス

メダルの価値

池井優 …… 4

イーハトブの友

高橋和島 …… 6

高層タワーマンションと心臓発作

日高昭二 …… 8

『邪宗門』の発行について

杉本忠夫 …… 10

枇杷の花

安森敏隆 …… 12

四五六会のこと

内野潤子 …… 14

ソリュブルと名をかえた

志村有弘 …… 16

「大木惇夫詩全集」全三巻を読む

片岡義男 …… 18

絵と文

アマリリス

中西美子 …… 22

宮地智子 …… 20



絵と文

ザルツカンマングートの旅して

さかもと ふさ …… 23

生れ乍らの無垢な感受性

志村 栄至 …… 24

丁酉元旦

山西 無聞 …… 26

絵と文

ボクシング

佐川 毅彦 …… 28

茗荷考

永岡 慶之助 …… 30

酉とりの歳としの特性

山本 千明 …… 32

一羽のスズメ

宮本 富夫 …… 34

矢切の渡し (上)

関八州夢幻譚

池田 一貴 …… 37

表紙・グラビア …… 後藤塗 (ごとうぬり)

メダルの価値



池井 優
(慶應義塾大学名誉教授)

金メダルだ」と痛感したのであった。

「それ以外のひと」

「メダルを獲った人は残ってください。会見場にご案内します。それ以外の人はここで解散です…」

二〇〇〇年、オーストラリアのシドニーでおこなわれたオリンピック、大会が終了し、選手団を乗せた直行便が成田に到着した。大勢のメディア関係者が待っていた。この大会で北島康介は平泳ぎ二〇メートル決勝に進んだ。結果は四位だった。初参加で四位入賞は恥ずかしくない成績だった。三位のフロドノフ（ロシア）にわずかに四三秒差でメダルを逃したのだ。

この大会で一番注目を集めたのは二人の女子選手であった。高橋尚子と田

村亮子である。マラソンで日本女子初の金メダルを獲得したＱちゃんこと高橋尚子は「皆さんのおかげですごく楽しい四十二・一九五キロでした」とコメントし、田村は大会前に「最高でも金、最低でも金」と宣言し実行した。柔道の野村忠宏、井上康生、瀧本誠を含め五人の金メダリストと銀、銅の十三人合計十八人のメダル獲得者がテレビカメラや新聞、雑誌記者に囲まれ、さまざまな質問に答えているのに対し、「それ以外のひと」となった北島は、迎えにきた家族の車で自宅に向かった。この時、北島とコーチの平井伯昌は「やはりオリンピックではメダルをとらなければダメなんだ。それも

オリンピックのメダルは国力の象徴
オリンピックでメダルを獲得すること、メダルの数が国力の象徴となり、国民を熱狂させナショナリズムを刺激する最善の手段であることに気が付いたのは、ソ連（現・ロシア）であり、東ドイツといった社会主義国であった。当初「オリンピックはブルジョワの祭典」と批判し「人民オリンピック」を呼び掛けてきたソ連は、東西冷戦のなか選手強化に着手した。現在はプロの参加も求められているオリンピックだが、かつてはアマチュアに限られていた。そこで考えたのが、自分は公務員、学校の教師などだが、それは名目に過ぎず実際の仕事はごく短時間で一日の大半を練習に費やし、一年の内何カ月かは国内と国際試合のため職場を不在にする国家丸抱えの「ステート・アマ」であった。その成果は一九五六年のメルボルン大会で示された。ソ連はメダル獲得数でアメリカを

抜きトップに躍り出た。金メダルはソ連の三十七に対しアメリカは三十二、メダル総数ではソ連九十八に対し、アメリカは七十四、四年後のローマ大会ではその差はさらに開いた。

練習時間と栄養費、競技施設と指導強化体制の成果がはつきりと示されたのであった。

金メダルを目指した

「北島プロジェクト」

シドニーでメダルを逃し、「それ以外の人」となった北島は、四年後のアテネ五輪でのメダルを目指すことになった。平井コーチは、ビデオやパソコンといった情報機器を選手に教えるための道具として活かすことはできないかと考え実行に移した。選手の泳ぎをビデオに収め映像化し、必要な情報を数値化しデータとして示せば「やっぱり、ここが問題だったのか」と選手もコーチもお互いに理解し、練習や次の試合に活かすことができる。専門家の力も借りた。平井の下、水中解析担

当、戦略分析担当、肉体改造担当、コンディショニング担当の五人で「専門家集団」＝「チーム北島」を作った。意見を戦わせながら、北島をアテネの大会でメダルを獲らせるプランを実行に移していった。マラソンなど陸上競技の長距離ランナーがやっている高地トレーニングも試みた。

平井はアテネ五輪から逆算して、一年毎にクリアすべき課題を設けた。二〇〇一年の世界水泳大会の平泳ぎ二〇〇メートルで三位に食い込み、翌年のアジア大会では世界新記録、二〇〇三年の世界選手権では一〇〇、二〇〇と世界新記録で優勝を飾った。アテネ大会の前に現れた強敵アメリカのハンセンの泳ぎを徹底的に分析し、オリンピックの舞台では最後の七十五メートルで勝負する作戦を立て見事に金メダルにつなげたのだった。アテネ、北京と二大会連続、一〇〇、二〇〇の金メダルはこうした計画によって達成されたのだった。

メダル願望の弊害

名言がある。「世界新記録はいつかは破られる。だが金メダルは一生ついて回る」。

アスリートにとってオリンピックでメダルを獲得する、ましてや金メダリストになれば国民的ヒーロー、ヒロインとしてもはやされ、運命さえ変わる。そこから薬物の力を借りてもオリンピックでメダルを獲りたいと実行に移し、露見してメダルはく奪、栄光の座から一気に転落するケースもみられる。なかにはロシアのように国家ぐるみでドーピングをおこない、多くの選手が出場停止に追い込まれた例さえ出てきた。

リオデジャネイロ大会で日本は史上最多となる四十二のメダルを得て日本中を熱狂させた。日本は薬物に関しては何とも厳しくクリーンな国として知られているが、二〇二〇年八月の東京五輪では①暑さ対策、②テロ対策と並んで各国からやってくる選手の薬物検査とその対策が大きな課題となろう。

モザイクプリンセス



高橋 和島

(作家・郷土史家)

知人Mさんによると、実習生として氏の窯業関係工場で働く中国人が「日本人はゴミ捨て場まできれいに飾り立てるのか。どこまできれいだらいいかなんたらう」と驚き呆れてるとか。

わたしの住まいは夏場摂氏四十度になる全国屈指の酷暑地美濃（岐阜県）東部の多治見市にあり、家庭ゴミの回収は台所から出る生ゴミが週二回、空き缶やペットボトル等リサイクルゴミが月二回となっている。

「え？ゴミ捨て場？」と聞き返すと、どうやら、町内各所に設けられたゴミ袋回収コーナーが中国人を呆れさせたところらしかった。

同所が外国人をして口をあんどぐりさ

せるほど見栄えのするものかどうか、わたしにはよく判らぬが、きれいなのは事実である。アートと呼んでも恥ずかしくない、見事なモザイクタイルの絵模様がどこさされているからだ。

多治見でも、わが家は笠原町と呼ばれる一角にある。平成の大合併で多治見市に組み込まれた地区で、ゴミ袋回収コーナーの数は約百箇所。その形と大きさは設置場所によって多少の違いはあるものの、コンクリートの床の広さは畳一枚程度、左右および正面背部に高さ一メートルほどの壁があり、カラスや犬猫からゴミ袋を守るネットが被せられるようになっていた。

五、六年前、町内の有志婦人たちが

ボランティアで、このコーナーに施釉モザイクタイルを貼り始め、今までに約百箇所のうち二割程度の施工を終えている。

モザイクタイルはこの地区の地場産業。ピーク時には百近い事業者が集積していた。地場製品を使って町を飾ろうとしているわけだ。

遊び心旺盛な彼女たちが自ら名付けたボランティアグループ名は「モザイクタイル・プリンセス」。略して「モザプリ」。メンバー約二十人の年齢構成は五〜六十代が中心。比較的若い勤め人もいないではないが、地元有力者婦人を含む主婦が大部分。「プリンセス」はちと強引な気がする。けれど

も、苦笑はしてもむろん野暮な注文をつける輩はいない。婦人は老若、既婚未婚を問わずみな「姫」でいい。だから「モザプリ」で通っている。

モザイクタイル壁施工の運びをおおざっぱに述べると、絵のデザインを決め、幾十枚かの紙貼りタイル作り、それらを現場に持ち込んでのコンクリート壁面貼り付け、紙を剥がしたあと目地塗り込み……といったところだろう。口で言えばこれだけのことだが、素人にとって実際の作業はもろろ大変である。

ゴミ袋回収コーナーはその役割からして当然、車や人の行き来が頻繁な道路沿いにあり、真夏の炎天下や木枯らしの吹く真冬の作業環境は劣悪である。モザプリは地元で言うところの「ええとこの奥さんや娘さん」である。職人仕事、肉体労働に慣れている身体が悲鳴をあげているはずなのに、ずっと活動が続き、しかも参加者が次第に増えているらしい。

ゴミ袋回収コーナーにモザイクタ

イル絵を施すという発想は感嘆ものだ。生活に欠かせない場所であり、町内各所に数多くあるにもかかわらず、イメージは悪く、邪魔者扱いされている。それをアートで飾り、目にして楽しい一角にしようという考えが素晴らしい。ちなみに、このコーナーは、町内の利用住民が交替で掃除をするため、ゴミ袋回収が終わったあとは、腰を下ろして缶コーヒーなどを飲めるくらいきれいになっている。

本来汚いのが普通で、必要な時以外は近寄るのを敬遠しがちな場所をきれいにするという、いかにも日本人ならではの発想はどこからきたのだろう。グループの旗振り役、リーダー格のkさん（六十代、地元企業社長夫人）を知っているが、モザプリ活動を始める前は、普通乗用車の廃車に独りでこつこつとモザイクタイルを貼り、車全体がタイル貼りというおもしろいオブジェを創りあげた。また、最近はおまじえでもないので（ご本人に言わせると押し掛けで）、自宅近くの居酒

屋に手弁当で通い、看板から建物内部の壁に至るまで、モザイクタイル絵を貼り付けた。

つまり、モザプリ活動はモザイクタイルが好きで、それを扱う才能も技術も持ち合わせる女性の旗振りが始まったものなのである。

茶碗や皿などの陶磁器同様にモザイクタイルも価格競争で太刀打ちできない中国製品に押され、低迷の一途をたどっている。

彼女たちの活動はこうした斜陽地場産業が影を落とす町を少しでも明るくしようという思いから行われているようだが、中国人を驚かせたのだ。成果は上がっている。それになによりタイル貼り最中のゴミ回収コーナーは、実に賑やかで楽しそうだ。

思うに、町中の沢山のゴミ捨て場をボランティア市民がタイルアートで美しく飾ることのできる、心の余裕ある町の将来は必ず拓ける。さらに躍進して言えば、片田舎にそんな町のある国の将来も暗いはずはない。

ほろ酔い詩歌紀行——イーハトブの友

日高昭二

(神奈川大学名誉教授)



岩手県花巻生まれの詩人・童話作家の宮沢賢治の作品には、しばしば「イーハトブ」の地名が出てくる。賢治といえば、この地名を思い起こすひとも多いことだろう。

賢治の大正十二年十一月頃の詩「イーハトブの氷霧」には、次のように記されている。

けさはじつにはじめての凛々しい
氷霧だつたから
みんなはまるめるやなにかまで出
して歓迎した

また、童話集『注文の多い料理店』の「広告ちらし」にも、「イーハトブは一

つの地名である。ドリームランドとしての日本陸中岩手県である」と記している。この地名の由来については、諸説あるが、確定してはいないようだ。

じつは、その「イーハトブ」の名が、酒の銘柄「イーハトブの友」という名で出てくるのである。それは、「税務署長の冒険」という童話のなかである。

もちろん、この「イーハトブの友」という銘柄は、もう一つ出てくる「北の輝」ともども、実在するものではなく、賢治の造語とみられている。

その「イーハトブの友」は、「イーハトブの友も及ばないとしますととても密造酒ではないと存じました」と

か、「瓶詰はみんなイーハトブの友である」などと記されている。それが、密造酒、すなわち非法法（つまり税金を納めず）に作られた酒ではないかという、疑いの文脈のなかで出ているのである。

また「北の輝」については、「はかり売のはたしかに北の輝です」とか、「ううい。いい酒ですね。何て云ひます」とたずねると、「北の輝です」と答えるなかで出ていたのである。

童話「税務署長の冒険」には、「石鳥谷」という地名が出てくる。岩手県稗拔郡石鳥谷町のこと、昭和三〇年に八幡、八重畑、新堀の三村が合併してできた町だという。花巻市の北隣に

あって、古来「古酒づくりの町」として有名で、造り酒屋があった。賢治は昭和三年頃、この町の南端の塚の根肥料相談所で、肥料の設計を行っているというから、町の事情は知っていたとみられよう。

ところで、童話「税務署長の冒険」であるが、ユグチュユモト村の山のなかで村をあげて密造酒を造っていたという「イーハトブ密造会社」を、税務署長が摘発に乗り出す物語である。

最初は、署長が小学校の「濁密防止講演会」にでかけて演説する。イギリスでは、牛に酒を飲ませると目方が増えるといわれていますが、人間にとっても、酒はエネルギーの根元です。高田の馬場の堀部安兵衛の三十人仇討ちも、酒の為にエネルギーが沢山あったからです。みなさん、国家のため世界のために大いに酒を飲みましょう。ただし、密造はいけません。半分こうじのままの酒を三升作って罰金を百円取られるなら、大びらで、いい酒を七斗飲もうなど、署長の気炎はあがる一方で

ある。

署長のもくろみは、悪口をいってどれくらい怒る人があるかを見て、村の「濁密」の数を勘定しようとしたのだという。

その夜の宴会で、署長は名誉村長や村会議員から酒をふるまわれるが、それでも翌日には、部下を派遣して調査に乗り出す。しかし、密造酒はなかなかみつからない。それで署長みずから乗り出し、山のなかであやしい小屋をみつつけ、一時は監禁もされるが、ようやくイーハトブ密造会社の工場で証拠品を押取するという冒険譚であった。密造酒の話は、童話「ポラーノの広場」にも出てくる。山猫博士デストゥパーゴが乾留会社と称して、じつは混成酒の密造をしていたという。ここでの混成酒は、「木精」（メチルアルコール）を混ぜたものということだ。酒に酒税はつきものだ。酒と税金の関係については、橋本憲一氏の『うまい酒が飲みたい』（晶文社）に詳しい。それによると、日本の酒税制度

は、明治七年に、江戸時代の「酒株制度」を廃止し、一定の免許料を払えば、だれでも酒をつくってよいとする免許監札制度になった。それが地方の農家などで自家用の酒をつくることにつながっていたという。

ところが、日清・日露戦争がくりかえされるたびに、戦費の調達のために酒税はあがる一方だった。明治三十七年に大蔵省管轄の醸造試験所ができ、酒造業の近代化はかられたが、うまい酒をつくるのが目的ではなく、国庫の財源を満たすためのものだったという。酒税の管轄が、農水産省ではなく、大蔵省であるというのも、なるほどとうなづけよう。

それで思い起こすのは、賢治の仕事が農業試験場の技師であったということである。賢治の詩「稲作挿話」にもみえているが、彼が取り組んでいたのは、土壌の改良や耐冷品種米の開発などであった。おそらく賢治にとつての密造酒へのこだわりは、米と酒の深いつながりにあっただろう。

高層タワーマンションと心臓発作



杉本忠夫

(虎の門病院 内分泌代謝科
非常勤嘱託医)

ます。しかし、発作後間もない場合は、血行再建術（血栓除去術）で冠動脈の血栓を取り除き、閉塞した冠動脈を再開通して、血流を再還流させ、元気に社会へ復帰されておられます。

このように、医療機関と、最新の装備を備えた救急車と救急隊員とが、一刻の猶予もなく、病院の救急室と緊密に連絡を取り合い、絶ゆまず救命活動に励んでおります。

救急隊員が苦勞した昔話を、少ししてみましよう。三、四十年前、当時多かった四・五階建てマンションや公共住宅では、階段が狭く、当時の救急隊の担架は長く、水平のままでは使えませんでした。また、当時のエレベータは奥行きが浅く、エレベータ内で担架を斜めにせざるを得ませんでした。エレベータの設置のないところが多く、救急隊員が背負って階段を搬送したものでした。

最近、移送台車（担架）は、軽量金属で造られております。また、伸縮の

日本人の三大死因は悪性腫瘍（がん）、脳梗塞（脳血栓・脳塞栓）、心臓発作（狭心症・心筋梗塞）とよく知られております。

最近、この三大疾患の診断、および治療技術は格段に進歩しております。

それに呼応するように、救急隊の活動が迅速かつ適切になり、多くの人命が救われております。救急隊の一刻を争う活動は医師、患者にとって心強い味方です。

たとえば、脳梗塞は約一〇時間以内

に適切な医療処置を行なえ（受けられれば）、発語障害、手足の麻痺などの後遺症は最小限に抑えることができます。中には、発語障害や手足の麻痺などが回復することが多くなっております。

心筋梗塞においても、医療機関と救急隊の迅速で緊密な連携によって、救命される頻度が多くなってきております。

急性心筋梗塞の発作をおこした方では、冠状動脈が血栓で閉塞してしまい

可能な搬送担架などに仕様が全面的に工夫改良されております。担架（台車）は高さ調節が自由で、移送車輪が装備され、救急車への搬入もレバー一つで台車の脚が曲がり収納され、迅速に搬送しやすくなりました。

そのうえ、以前より救急車の車体がひとまわり大きくなっており、車内での点滴、酸素吸入、心電図、AEDなどの検査・処置も行ないやすくなりました。

話は変わりますが、この一〇数年の間に、事務所用高層ビルに加えて、高層マンション（タワーマンション）が次々と、雨後の竹の子のように建設され、その数が急速に増え続けております。また、高層マンションの高さも高くなり階層（数）も増えております。

そのうえ、都心では、マンション（居住用）と企業の事務所、ホテルなど複合型の高層マンションも建設されております。

日本は国土が狭いため、土地の有効利用もうなづけます。ところが、カナ

ダ、アメリカ、中国のような広大な国土を有する国においても高層マンションが増えているとのことです。マンションは生活する上で機能的かつ便利さがもたせられる理由かと考えられます。

ところで、高層マンションと先ほどの心臓発作（狭心症・心筋梗塞）について、興味のある研究報告がカナダで、二〇一六年発表されております。そこで、この研究発表を少しみてみましょう。

万が一不幸にも、火災が発生した場合、消防署のはしご車は高層階には届きません。また、救急隊員も苦しんでおられる救急を要請された方々へへ急いでも階層分の時間が掛かり現場への到着が遅れることが考えられます。

ところで、カナダのトロント市でI・E、ドレナ博士のグループが高層マンションの階層と心臓発作の救命率を検討し、報告しております。

この研究報告では二階までの住民と、三階以上のマンション住民を分け、マンションで心臓発作による心停

止のため救急隊により搬送された方々の予後について調査・報告されております。

二〇〇七～二〇一二の六年間の間にトロントで、心臓発作で搬送された方は八二一六人でした。その中で、二階以上の住人は五九九八人、三階以上の住人は一八四四人でした。

そのうち、病院から退院できた方の比率は、二階以上の住人では四・二％（五九九八人中二五二人）でしたが、三階以上の住人では二・六％（一八四四人中四八人）と退院率が二階以上の住人に比べてかなり不良でした。

また、二五階以上の住民では退院された方おられません。

この退院の割合の低下は、救急隊が高層階の現場への到着に時間がかかり、病院への搬送が遅れたためと考えられております。

今後の対策として緊急時に高層マンションのエレベーターと救急車が連動し、救助活動を迅速に行えるなどの工夫が必要です。

『邪宗門』の発行について



安 森 敏 隆

(同志社女子大学名誉教授
歌人)

北原白秋の処女詩集『邪宗門』は天金の上質紙で、表紙は紙と赤クロス布を使った豪華本である。さらに初版は、「フランス綴」になっていることを、先に書いた。この詩集の出た頃について室生犀星は、次のように言っている。

明治四十二年三月、北原白秋の処女詩集『邪宗門』が自費出版された。早速私は注文したが、金沢市では一冊きりしかこの『邪宗門』は、本屋の飾り棚にとどいていなかった。金沢から二里離れた金石町の裁判所出張所に私は勤め、月給八円を貰っていた。月給八円の男が一円五十銭の本を取り寄せて購読するの

に、少しも高価だと思わないばかりか、毎日曜ごとに金沢の本屋に行つては、発行はまだかというふうに急がし、それが刊行されると威張つて町じゅうを抱えて歩いたものである。誰一人としてそんな詩集などに眼もくれる人はいない、彼奴は菓子折を抱えて何の気で町をうろついでいるのだらうと、思われたくらいである。

(室生犀星「北原白秋―我が愛する詩人の伝記」昭和四十六年十二月)

これは、出版された当時を回想して書かれたものであり、多少の思い違いなどあるものの、北原白秋の存在が、いかに当時の若者を席卷していたかということをリアルに描出していて参考になる。「月給八円の男が一円五十銭の本を取り寄せて購読」したというところに先ずは驚嘆する。

初版『邪宗門』は、厳密には「明治四十二年三月十五日発行」となってお

り、定価も「巻圓」となっている（なお、初版『邪宗門』には、表紙や目次の場所などが違う「異版」も存在する）。給料の八分の一をさいて、室生犀星はじめ当時の若者が貴重な詩集を買求めていたのである。発行資金や発行部数については、藪田義雄氏が次のように述べられているのが参考になる。「白秋の処女詩集『邪宗門』は明治四十二年三月、書肆易風社から刊行された。

蒲原有明の世話で、半ば自費の形であった。前年の冬ちかく有明と鈴木鼓村（琴の楽人）に同道してもらつて飯田町のその社に赴き、出版上のとりきめが出来たのだが、坊ちゃん気質のぬけきらない白秋は、そうした交渉事になるとまるで不得手で、ろくろく口もきけなかつたらしい。国許の父から二百円送ってもらつて、その金を有明に預け、部数五百部として足りないところは発行所で負担してもらふことには話がまとまつたのである。ところで年末になつても見本刷が出たきりで一向

に仕事が進めてくれない。また五十円もつていつて、天金にしてもらえまいかと遠まわしの催促をするのがやつとどつた」（藪田義雄『評伝 北原白秋』）

発行部数は「五百部」で白秋は、自費出版として結局は「貳百五十拾円」支払つたことになる。「父上に献ぐ」とまず、「扉」においてこの詩集は、没落寸前の北原家の父から出してもらつたものであった。

「パン（PAN）の会」で親しくなつた石井柏亭に装幀と挿画を頼み、山本鼎に木版の彫刻、木下李太郎に挿画を貰うといった熱の入れようであった。

二年後の明治四十四年十一月に東雲堂書店から、高村光太郎の装幀となつて「改訂再版」の『邪宗門』が出された。再版本には挿し絵がなく表紙も紙装になり、作品も「酒と煙草に」「赤き恐怖」が削除され「蝸」「我子の声」が加えられている。大正五年七月に「改訂三版」も出ている。

枇杷の花



内野潤子
(歌人・エッセイスト)

私の家の庭には、枇杷の木が三本ある。昔は枇杷の木を植えると、病人が絶えないという人がいたが、それは逆に病人を治すため枇杷を必要としたからだと思う。

古い昔から伝わる枇杷療法があり、私体が調を崩した時、娘が枇杷灸の一式を求めて背中に当ててくれたのだ。そういう治し方は、急によくなくなるというのではなくて、少しずつ続けるうちに悪い処が消えていくのだった。めまいばかりしていた私は、いつのまにかおさまって、耳鳴りのひどい音も静まったのだった。

現代医学では強い薬ですぐ治すという傾向だから、どうしても薬の副作用

が出てしまう。

ひどい咳で重い風邪をひいたこの八月、私を心配した主治医が強い薬を出してくださったが、本当にその薬を飲んだら、二日目にはびたつと咳が治った。その後、体ががくがくして、字を書くと手がふるえたりした。

私は今枇杷灸はしないが、庭の葉をそのまま体にまいて寝ることにしている。生の葉を痛いところにまくと、翌日は快く動ける。

枇杷灸は生の葉の上に燃えない紙をのせてその上から、棒状のもぐさの筒をもやして、患部に当てるのだが、筒のもぐさが火の粉をまいたり、煙が出るので心くばりが大変なのだ。友人た

ちにも紹介してあげたが、マンションの方は煙がこもるので困るらしい。友人の一人の娘さんがインターネットで電機の枇杷灸を探し当て、それは二個組で七万円という高価だが、友人はそれを毎日のように使って元気で過ごしている。

私も求めて使ったがパイプ型の容器の中に枇杷の液をいれてその湯気が体を温めるというもので、顔も背中も体中使えるのが便利である。液は葉をお酒にひたして作る。

枇杷の実は果物の中では価が高く、子供の頃、虫歯を抜くのを我慢してたった一つ買ってもらった思い出がある。

私の歌のお仲間枇杷山を持っていてその実を育てている歌を読むと、摘花をしたり袋をかぶせたりという作業が大変らしい。

私方の三本の木の一本には、くしゃくしゃの花のあと、小さな実がみつけた。鳥や鳥がつかないうちにとつて食べたが、甘くておいしかった。売りの枇杷は姿はよくても、それ程甘くないのが不思議だ。

枇杷の花に日差しの移り極楽の妙な調べかすかにきこゆ

この一首は歌の先輩の、故石田耕三氏の作品で、達筆の色紙を私にくださつたのを、本棚に飾り、日夜眺めている。

この歌は、外の花ではなく枇杷の花でなくては出ない味わいがある。

地味で毛をまつてかたまる枇杷の花も日の光を受けて輝く一瞬があるのだ。その姿から極楽の幻を見てそこにかなでられる美しい音までを聴いている作者には、花の予感が漂ってくる余韻がある。

現実に当時の氏は、病気の為片方の足を膝からきりおとすという体であった。

その後も心臓の手術を受けて、自分の生を危ぶみながらよく耐えて毎日を送っていたのである。

朝になって、台処で妻の食事をつくる音をきいて、「あ、まだ生きている」と思うような日々であった。

私自身、今高齢となり、一時はもうだめですと医師に言われたことがありながら、二人の娘の必死な処置で、い、医師にめぐりあい、その方の力で再生した現在なので、当時の石田氏の実感には本当によく分かるのである。

娘は庭の三本の木から、毎日五・六枚の葉を採って、汚れを洗い葉のまわりのぎざぎざをはさみで切りおとし肌に痛くないようにしたのを私にもつけてくれる。

その生の葉を肌着の下にはさんで眠ると、体中の悪いものを吸って変色し、朝になると固くこわばつたのを体からはがすことにしている。

信じる人にはきくし、信じない人にはきかないのが漢方の特徴だと思う。

私は時々、風邪をひいたり熱が出たりするけれど、本当に困った状態にはならないのがやはり毎日の枇杷のおかげと思っている。

耳だけが遠くて、浮世から遠ざかってはいるが、曾孫もいる大家族でこの世の移りかわりを見て、笑つたり心配したりしている。三本の枇杷の一本は、友人が大きな鉢に育てたのを運んでくれたのだが、三本ともそれぞれ個性があり、実のなる一本は庭の奥にあつて一番葉が大きく、丈もすくすくとのびている。

娘は植木屋さんがくると、「あまり伐らないでね」と言いにゆく。一本ある夏柑の木も『蝶の卵がついているからあまりきらないでね』と心配する。

小さい生き物が消えたら、自分たちだつて消えてしまう。命は大事、自然は大事という気持ちは、私もこの頃共感深く感じるようになってきた。